



Title	フィリピン語を学ぶ高校生と大学生との交流会
Author(s)	矢元, 貴美
Citation	外国語教育のフロンティア. 2020, 3, p. 121-132
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75627
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フィリピン語を学ぶ高校生と大学生との交流会

Interactions among Senior High School Students and University Students Studying Filipino Language

矢元 貴美

Abstract

This article will discuss observations and findings from the interactions of senior high school students who have Filipino roots and are studying Filipino language as their mother tongue / heritage language and university students studying Filipino language as their specialization. Because motivation in learning Filipino language is one of the common challenges for both senior high school students and university students in Japan, this activity aimed to provide motivation for the said students. In the activity, the students introduced themselves and their schools, shared their experiences in the Philippines, sang Filipino songs, danced traditional Philippine dances, and enjoyed games, tongue-twisters and conversations in Filipino and in Japanese. The reactions and comments of the senior high school students were both positive and negative. However as a whole, the senior high school students were interested in the university students and many of them contributed to the activity. On the other hand, the university students found the activity inspiring and it was a really good experience for them. They were impressed and inspired by the high school students with Filipino roots and considered being able to mingle with them a rare and pleasant experience. Through this activity, the followings were emphasized: 1. The need for continuous interaction among these types of students, 2. The need for an open communication among them, 3. The need to examine the effects brought about by the activity.

キーワード：学習動機、交流、母語・継承語、第二外国語

1. 本報告の目的と背景

本稿では、大学において専攻語としてフィリピン語を学ぶ学生たちと、高等学校において母語・継承語¹⁾としてフィリピン語を学ぶ、フィリピンにルーツを持つ生徒²⁾たちとの交流会について報告する。筆者は今回交流会に参加した生徒と学生が学ぶ両校でフィリピン語教育に携わっている。本交流会はフィリピン語学習者の学習動機づけをねらいとしたものであり、今後のフィリピン語教育のあり方を考える上での示唆を与えるものとしたい。

現在、日本国内の学校で学ぶ外国にルーツを持つ子どもの教育施策では日本語教育に重

点が置かれている。母語・継承語教育にはまだあまり焦点が当てられていないものの、国際交流団体や外国人自助組織、一部の公立学校で取り組まれており、当該話者の在留者数が多い中国語、韓国・朝鮮語、ポルトガル語、ベトナム語の授業や母語教室が比較的多く設置されている。同様に在留者数で上位を占めるフィリピンにルーツを持つ子どもを対象としたものは上記の言語に比べると少ないが、フィリピン語の授業や母語教室を設置している中学校や高校（齋藤 2005, 佐藤 2001: 197-198, 志水 2008）もある。

上述の他の言語は子どもがルーツを持つ国や日本国内において進学・就職等で活用することができ、社会的に強い地位にある言語であることから、実用的な理由によって言語を学びたいという道具的動機づけ³⁾を持てる可能性が高い。しかし、フィリピンでは英語が公用語として教授言語やメディアの言語としても使用されていることから、英語の社会的地位が非常に高く、日本の学校でも英語は習得を求められる言語である。そのため、子どもたちは英語の方にはるかに強い道具的動機づけを持ちやすく、フィリピン語の学習動機は低くなりがちである。また、日本国内での学習者や学習機会が非常に少なく、特に社会的に弱い地位にあるとも言える。筆者が携わっている高校のフィリピン語の授業でも、生徒の中には、フィリピン語は勉強しても役に立たないとか、英語や日本語を勉強する方がいいと考えている者もいる。

一方、大学でフィリピン語を専攻語として学ぶ学生たちは、1年生では新しい言語を学習する新鮮さや楽しさも相まって、学習動機や学習意欲を持つ学生が多い。しかし、2年生になると、フィリピン語を勉強する目的が見つけられなくてつらいと吐露する学生も現れる。卒業後に仕事等でフィリピン語を活用できる見込みはほとんどなく、道具的動機づけが持てないことが大きな要因である。

留学、ボランティア活動、インターンシップ等でフィリピンに中長期滞在するなどし、現地に友人や知人がいる学生の中には、SNSやチャットを通して日常的にフィリピン語でやり取りをしている者もいる。しかし、現地に友人や知人がいない場合、日常生活でフィリピン語を活用する場面はなく、特に1・2年生は授業でネイティブの教員と会話する際に用いる程度である。日本国内ではフィリピン出身者が多数暮らしているものの、留学生も含め、学生たちが彼らと関わる機会はほとんどなく、統合的動機づけ⁴⁾も持ちづらい。

このように、大学でも高校でも、フィリピン語の学習者に学習動機をいかにして持たせるか、またその動機をいかに維持させるかが共通の課題である。そこで高校生と大学生双方の学習動機づけをねらいとし、X高等学校（以下X高校）に在籍するフィリピンにルーツを持つ生徒たちと大阪大学外国語学部フィリピン語専攻の学生たちとの交流会を企画するに至った。

筆者としては、高校生には、日本人にもフィリピンが好きな人やフィリピン語を学んでいる人がいることを知り、自身や親の国や言語に誇りを持ち、自信を持って学んでほしい

い、大学生には、日本で身近に暮らすフィリピン人、特に、努力している子どもたちに目を向け、国内でもフィリピン語を使える機会があることを知ってほしいという気持ちもあった。

2. 交流会の参加者が在籍する学校と参加者の概要

2.1 X高校

X高校は近畿地方の公立高校である。1975年に開校され、2001年度からは一般の入学者選抜に加え、帰国生徒と外国人生徒を対象とした入学者選抜を実施している。2019年4月時点における全校生徒は564名で、帰国生徒と外国人生徒は一般の入学者選抜を経て入学している者も含めて65名在籍しており、生徒の出身地は日本を含めて13か国にのぼる。そのうちフィリピンにルーツを持つ生徒は24名で、日本語指導が必要な生徒は38名（うちフィリピンにルーツを持つ生徒は13名）である。フィリピンにルーツを持つ生徒は1999年に初めて1人入学し、その後徐々に増え、2000年代後半には毎年5人以上が入学するようになった。フィリピンにルーツを持つ生徒がこれほど多く在籍する高校は全国的に珍しく、X高校が立地する自治体の高校の中でも最多である。

X高校では1980年代後半から日本語指導が必要な生徒や外国にルーツを持つ生徒に対する支援体制が整えられてきた。朝鮮語、中国語、フィリピン語、ベトナム語ができる常勤教員も配属されている。教科指導においては、日本語指導が必要な生徒を対象とした抽出授業⁵⁾やティームティーチングによる入り込み支援⁶⁾のほか、放課後には日本語の勉強会も行われている。帰国生徒と外国人生徒を対象とした入学者選抜で入学した生徒を中心に構成される部活動では、日本語学習や母語・母文化の学習などの活動を行い、文化祭や校外での様々なイベントに積極的に参加している。

ルーツに基づく自尊感情の育成とアイデンティティの確立を目的とした各言語の授業⁷⁾もカリキュラムに組み込まれており、母語や母文化の保持を目標に、単位が認定される課内の授業として設定されている。2019年度に開講されているのは1年生3言語、2年生6言語、3年生7言語である。

フィリピンにルーツを持つ生徒を対象としたフィリピン語の授業は2003年度に初めて開講されて以来、毎年度開講されている。各学年の生徒を対象に週1コマ（50分×2限）ずつ行われており、2019年度の受講生徒数は3年生5名、2年生7名（1学期までは6名）、1年生10名である。大半は小学校や中学校時代に来日し、国籍、出身地、日本での滞在年数、入学時の年齢は様々である。近年、日本生まれまたは幼少期にフィリピンから日本へ移動し、日本での生活の方が長く、フィリピン語の言語運用能力が初級程度である生徒が増えており、2019年度の受講生徒では3年生1名、2年生4名、1年生2名が該当する。

在日歴の長いフィリピン人講師M氏と、日本人の講師（筆者）が2人1組で授業に当たっ

ており、M氏は2007年度から、筆者は2009年度から担当している。外国にルーツを持つ生徒を対象とした母語・母文化の授業で講師が2名配置されているのはフィリピン語のみである。他の言語に比べて受講生徒数が多いことと、生徒たちのフィリピン語の言語運用能力に差があるため、言語の学習はフィリピン語の方が得意な生徒、日本語の方が得意な生徒に分かれて行う必要があることがその理由である。

カリキュラムは決まっておらず、主に①フィリピン語での読解や文法学習、②フィリピン語作文、③フィリピン語での話し合い、④ダンス・歌や料理、といった活動を行っている。

読解や文法学習では、フィリピンで使用されているフィリピン語教科書を順に音読し、語句の意味の確認や内容理解をした上で、内容についての問い合わせに答える、要約を書く、関連する文法事項を学習するといった活動を行う。日本での生活が長い生徒、日比間を頻繁に往来していた生徒、フィリピン語以外のフィリピン諸語（ビサヤ語、ビコル語など）が母語・継承語であり、フィリピン語教科書の内容理解が難しすぎる生徒は、低学年向けの読み物などの読解や、語彙や文法事項の学習を行う。日本育ちの生徒は初級文法や基本語彙、動画や写真を用いたフィリピンの生活等の学習を行う。

ダンスや歌は、校内・校外行事で披露するために練習する。料理は文化祭や、外国ルーツの高校生が集まるイベントでも作るが、学期末などの授業時間に作って食べ、お世話になっている先生方にも振る舞うことがある。

2.2 大阪大学外国語学部フィリピン語専攻

大阪大学外国語学部は大阪府箕面市に所在し、日本の大学では、専攻語としてフィリピン語が設置されている2つの大学のうちの1つである。大阪外国語大学時代の1984年にインドネシア・フィリピン語学科が設置された後、フィリピン語専攻は1993年に独立した。2007年に大阪外国語大学と大阪大学が統合した後は毎年13名程度が入学している。2019年度、フィリピン語専攻の専任教員は2名、ネイティブの外国人専任教員は1名で、他に非常勤講師3名（日本人教員2名、ネイティブ教員1名）が言語の授業を担当している。

学生たちは、希望してフィリピン語専攻に入学してきてはいるが、フィリピン語を専攻語として選択した理由は様々である。フィリピン語自体や、フィリピンの歴史や社会問題に関心がある、フィリピン出身の母親とフィリピン語で話せるようになりたいといった具体的な理由を挙げる者もいれば、高校の先生に勧められたとか、入学試験の結果で決めたという者もいる。在学生のうち、フィリピン出身の母親を持つ学生が2名いるが、どの学生も第一言語は日本語である。

1・2年生は週5コマの専攻語の授業を受講している。1年生ではネイティブ教員1名が担当する授業が2コマと日本人教員2名が担当する授業が3コマである。それぞれの授業の学習内容は重複している部分が多く、学習内容がより定着しやすいようになっている。

1年生は専攻語以外に教養系の科目を多く履修する。2年生ではネイティブ教員2名が担当する授業が3コマと日本人教員2名が担当する専攻語の授業が2コマであり、一部重複する学習内容はあるが、1年生の授業と比較すると各授業での学習内容は異なっている。2年生では専攻語の授業に加え、半期のみ週1コマの基礎演習や、専攻や学部共通の講義科目も受講する。3・4年生では専攻語、専攻や学部共通の講義科目から広く選択し受講する。

3・4年生になると留学やインターンシップ、ボランティア活動等でフィリピンに加え、英語圏の国で中長期滞在する学生も多い。課外では、1年生は夏祭りでフィリピン料理を販売し、2年生は秋に開催される語劇祭でフィリピン語劇を披露する。フィリピン語専攻の学生を中心に構成される学生団体「フィリピニアーナ（OGF）」ではフィリピンの伝統舞踊やフィリピン語の歌を習得し、学内外で披露していたが、近年は活動を休止している。

3. 交流会の概要と準備

交流会の場所はX高校で、フィリピン語の授業時間内に実施することとした。生徒たちが余分な交通費や時間を費やすことなく参加できることと、授業の一環として実施することにより、クラスメイトと協力して活動する機会を作れるということからである。

日程は2019年9月18日に設定した。X高校は大阪大学箕面キャンパスから距離があり移動に時間がかかる。授業期間に設定すると授業の空き時間を利用してX高校へ行くことはできないため、大学が夏季休業中で高校は授業期間中である9月で、できる限り通常授業に支障が出ない日を選んだ。

交流会の目的は以下のように設定した。高校生側の目的は、①大学でフィリピン語を学んでいる日本語母語話者の学生にフィリピン語やフィリピンについて教える、②自分たちの経験やX高校での生活について伝える、③学生たちがフィリピン語を学習している理由やフィリピンで経験したことを知る、という3点である。大学生側の目的は、①日本で暮らすフィリピンにルーツを持つ生徒たちからフィリピンについて学ぶ、②生徒たちが日本での生活で感じたり考えたりしていることを知る、③学んでいるフィリピン語を生徒たちとの会話や発表で実際に活用する、という3点である。

高校生の参加者は当日授業に出席していた、3年生5名、2年生7名、1年生7名である。大学生側は、フィリピン語専攻の3・4年生9名と、サポーター⁸⁾やボランティアとしてフィリピンにルーツを持つ子どもたちと関わっている大阪大学の卒業生2名が参加した。学生の参加者にはフィリピンにルーツを持つ者はいなかったが、参加者のうち2名は、今年度からサポーターとしてフィリピンにルーツのある児童生徒の支援に携わっている学生である。全学年の学生に案内し参加を募ったが、1年生には希望者がおらず、2年生の希望者数名は都合が合わず参加できなかった。

X高校では夏休み前から数回、各学年の授業時間の一部を利用し、筆者から交流会の趣

旨や参加する学生の概要を説明し、交流会の内容について準備を行った。学年ごとのクラスの特性や生徒たちの得意なこと等を勘案し、M氏と筆者で内容の大枠を考えた。生徒たちからの提案を取り入れて内容を決定した後、学生たちに教えるダンスや歌の練習、フィリピン語の語彙等の選択、発表内容や担当の話し合いを行った。最初に筆者が交流会を提案し、生徒たちに希望を尋ねた時から、大学生はいつ来るのか、何をするのかと楽しみにしている生徒もいた。

大学では交流会の6日前に事前学習と準備を実施し、参加する学生のうち5名が出席した。都合がつかず欠席した学生には配付資料をメールで送付し、事前に読んでもらう形をとった。まず、X高校の概要として、生徒数および日本語指導が必要な生徒や外国にルーツを持つ生徒に対する支援体制、フィリピン語の授業の概要と授業での主な活動内容を筆者から説明した。その後、交流会の目的や注意事項と当日の予定を確認し、発表担当者を決定した。発表内容はフィリピン語専攻の紹介（3名1組で発表）とフィリピンでの経験の共有（各学年の授業で2名が1名ずつ発表）とし、全員が少なくとも1回は発表することとした。

また、交流会終了後に任意で、生徒たちへのメッセージ（日本語とフィリピン語で）とA4用紙1枚から2枚程度のレポート（日本語で）を提出するよう伝えた。メッセージは生徒たちに伝え、レポートは帰国生徒や外国人生徒を担当している教員等、X高校の教員にも目を通してもらうことを説明した。

4. 交流会の内容および生徒や学生の反応

3年生の授業（10:50～12:40）では、全員が自己紹介をした後、高校生からX高校の授業や部活動を紹介し（写真1）、大学生からフィリピン語専攻の紹介とフィリピンでの経験の発表を行った（写真2）。その後、ギターが得意な生徒の生演奏に合わせ、一緒に童謡を歌い、生徒たちがフィリピン語のラブソングを2曲披露した（写真3）。

写真1 高校生の発表

写真2 大学生の発表

写真3 高校生の歌の披露

2年生の授業（13:25～15:15）では、全員の自己紹介の後、大学生からフィリピン語専攻の紹介とフィリピンでの経験の発表を行った。その後、昨年度校外のイベントで踊った、フィリピン語の民謡に乗せたフィリピン舞踊を高校生が大学生に教えて全員で踊り（写真4）、最後にフィリピン語の早口言葉と最近の若者言葉を高校生が大学生に教えた（写真5）。

写真4 フィリピン舞踊の練習

写真5 早口言葉の練習

1年生の授業（15:25～17:05）では、ゲーム（写真6）でアイスブレーキングを行ってから全員で自己紹介をした。その後、大学生からのフィリピン語専攻の紹介とフィリピンでの経験の発表を聞きながら、高校生と大学生混交のグループで自由に会話した（写真7）。ゲームの手順はbingoゲームを活用した以下のようなものである。①優しそうな人、眼鏡をかけている人、などとマス目に書かれたbingoシートを持ち、音楽が流れている間は踊りながら教室内を周る。②音楽が止まると、埋めたいマス目に書かれた人を見つけて生徒と学生のペアになり、生徒は学生にフィリピン語で、学生は生徒に日本語で相手の名前と好きな物を質問する。

写真6 ゲーム

写真7 グループでの会話

自己紹介は生徒も学生も可能な限りフィリピン語で行った。フィリピン語の運用能力が初級程度の生徒たちも、授業で学習した内容を思い出し、講師や他の生徒の助けを借りながら、名前や出身地や好きなことをフィリピン語で話した。生徒たちは学生たちのフィリピン語による自己紹介を興味深く聞いており、一人一人に大きな拍手を送っていた。

フィリピン語専攻の紹介で学生たちは、大学ではフィリピン語やフィリピンに関する授業を受けるほか、学内の行事でフィリピン料理を作り販売する、フィリピン語で劇を演じるなどすること、フィリピン人の先生の授業もあること、留学やインターンシップ等でフィリピンに行く学生も多いことなどを、写真も交えながらフィリピン語と日本語両方で説明した。フィリピンでの経験については、授業やボランティア活動等の内容、行ったことのある場所、好きな料理、フィリピンの友人たち、印象に残っていること等を可能な限り両言語で説明した。

学生の発表に対して生徒たちからは、なぜフィリピン語を勉強しようと思ったのか、フィリピン語は難しいか、好きなフィリピン料理は何か、フィリピン国内ではどこに行つたことがあるか、どんな劇を演じたのか、高校生でもボランティアに参加することはできるかといった質問が出された。学生はその時々に応じて日本語またはフィリピン語で答え、生徒たちは必要な場合には生徒同士で訳し合っていた。

3年生のX高校の授業や部活動の紹介では、それぞれの分担内容を主に日本語で説明し、X高校に入学を希望した理由やX高校の良いところも各自発表した。童謡は生徒も学生も知っている曲で歌詞も配布したため、全員で歌うことができた。ラブソングの1曲目は生徒が選んだもので、2曲目は学生のリクエスト曲を歌ってくれた。日本での生活が長い生徒やフィリピン語の歌に疎い生徒は一緒に歌うことができなかつたが、生徒たちは生徒のギターの腕前に感心し、リクエストに応じてくれたことにも喜んでいたようであった。

2年生の授業でのフィリピン語専攻の紹介とフィリピンでの経験の発表では、それぞれの発表後に、日本での生活が長い生徒もフィリピンでの生活が長い生徒も積極的に質問し、大学生の経験に興味を示していた。フィリピン舞踊は高校生たちが率先してステップ

を教える、隊形を指示するなどし、大学生も短時間で習得して最後には全員で一緒に踊ることができた。高校生による早口言葉の講義では、全員で発音した上でどれほど早く間違えずに言えるか試し、大学生からも笑い声が挙がるなど楽しんでいる様子であった。

1年生は普段から歌や踊り、おしゃべりが好きな活発な生徒が多いため、ゲームでは音楽に乗せて楽しく大学生の間を周り、積極的に話しかけていた。大学生の方は高校生が来てくれるのを待つ体勢になってしまったが、互いにフィリピン語と日本語の両方を用いて質問と回答ができた。グループで自由に会話する際には、高校生と大学生とが交互に座れるよう座席を配置したこともあり、フィリピン語が得意ではない大学生もフィリピン語を使って話そうと努力していた。

各授業の合間や休憩時間、1年生とのグループでの会話の際には、M氏が自宅で料理したフィリピンのデザート（蒸しパンや餅やババロアのようなお菓子）が配られ、高校生も大学生も嬉しそうに受け取って食べた。学生の中にはそれらのお菓子についてM氏に質問する者もあり、M氏が料理の名前や材料、作り方を説明した。

5. 交流会後の生徒と学生の感想や意見

参加した大学生9名のうち5名がメッセージとレポートを提出した。3年生と2年生の生徒たちには交流会の翌週、1年生には翌々週にメッセージを伝えた。学生は可能な範囲で両方の言語で書いたため、フィリピン語の方が得意な生徒はフィリピン語のメッセージ、日本語の方が得意な生徒は日本語のメッセージを読んだ。生徒たちはメッセージを寄せた学生がどの人だったかを確認しながら読み、学生のフィリピン語の作文の力に感心している様子であった。

生徒たちには交流会の感想や、再度交流会が開かれた場合の希望も尋ねた。3年生からは、楽しくて2時間があっという間だったとか、時間が足りなかつたという感想が挙がった。また、卒業までにもう一度大学生との交流会に参加できるかどうか分からないが、次の機会があれば他の歌も歌いたいという声もあった。

2年生では、中学生や高校生になってから来日した生徒たちからは、ダンスを教えることができて楽しかった、自分が知らなかったフィリピンのことを知ることができた、という感想が挙がった。一方、日本での生活が長い生徒たちは、また交流会があれば参加したいかと尋ねると、どちらでもいいという答えや、大学生がまた来てもすることがないのでないかといった消極的な反応が返ってきた。

1年生からは感想や提案が積極的に出された。まず、大学生がどれくらいフィリピン語で話せるか分からず、自分たちから話しかけるのが難しかったので、恥ずかしがらずにもっと積極的に話しかけてほしかったという感想が数名から出された。ゲームを1つした後すぐにグループで話すことになったが、まだ打ち解けられていなかったので、ゲームは

2つした方が良いと提案した生徒もいた。筆者が、次の機会には生徒たちから学生にフィリピン語を教えてもらおうかと話すと、フィリピン語を使ったゲームをして良いのではないかという案が出された。グループでの会話については、よく知っている人と話すのもよいが、知り合ってすぐの人と話ができるというのも良かったという肯定的な感想を話した生徒もいた。

3学年を通して、比較的最近フィリピンから日本へ移動した生徒たちの関心は高い一方、日本での生活が長い生徒たちの関心は低い傾向がある。しかし、全体的には学生たちに関心を持っている様子が見られ、自分の得意なことを活かして積極的に貢献していた生徒が多くかった。M氏は、交流会は生徒にとっても学生にとっても良い機会になったと語り、次はフィリピン料理と一緒に作って食べてはどうかと提案していた。

学生たちにとっては、普段接する機会が少ない、フィリピンにルーツを持つ生徒たちと話すことで彼らを身近に感じ、生徒たちに感心し、刺激を受ける貴重な体験となった。レポートを提出した学生たちは、同じような機会があればまた参加したいと述べている。学生たちが感想として寄せた主な点は次の3点である。

1点目は、X高校のフィリピン語の授業が生徒たちにとって有意義な場であるということである。学生たちは、生徒たちが同じ言語で話せる友人と気兼ねなく過ごせる場になっているとか、親の母国へ関心を持ち続ける機会になっているとか、将来フィリピンというバックグラウンドを活かすを選択した際に役立てることができる役割を担っていると感じていた。

2点目は、フィリピン語を学ぶ日本人に対する生徒たちの関心が高いことである。生徒たちから、料理や地名や歌といったフィリピンに関することや、フィリピン語を学ぶ理由を尋ねられたことが印象的であったと述べた学生が5名中3名いた。日本人から見たフィリピンの印象に関心を持っていることから、日本でフィリピン語ができる人が先生以外にもいることを喜んでいるようだったとか、日本では学ぶ人が少ないフィリピン語を学び、フィリピンに行ったことがある学生と交流できたことは高校生にとって良かったのではないか、と感じていた。

3点目は、フィリピン語をさらに勉強する必要性である。生徒たちと流暢に会話することができず不便な思いをさせたことからその必要性を感じた学生もいれば、生徒たちがフィリピン語も英語も日本語も話せることに感心し、自分ももっと英語やフィリピン語を勉強しなければと思った学生もいる。また、サポーターをしている学生は、子どもたちのためにももっとフィリピン語を学ぼうというモチベーションが持てたと述べている。

学生たちから挙がった主な課題は、積極的に行動することと、丁寧に事前準備をしておくことの2点である。学生たちは、今回の交流会で質問したり話しかけたりして交流会を盛り上げてくれたのは高校生であり、大学生は受動的であったと感じ、学生たちも積極的

に動く必要があると考えていた。また、次の機会があれば、ゲームを中心にする、話したいことや聞きたいことを事前に尋ね合っておくといった、事前準備の必要性も挙げられた。

大学生のレポートは帰国生徒や外国人生徒を担当している教員の1名に渡し、同じ分掌に所属する他の教員や校長に共有してもらうことになった。また、授業を担当しているM氏にも共有して目を通してもらった。

6. 今後の課題

今回の交流会で設定した、高校生側と大学生側それぞれ3点の目的は達成できたと筆者は考える。一方、今後の課題としては以下の3点を指摘することができる。

1点目は、交流会を継続することである。今回の会は一定程度有益であったと考えられ、参加した高校生や大学生からは次回開催の希望も出されている。今回だけの企画に終わらせらず、年1回から2回程度開催し、高校生と大学生の双方にとって有益な機会を引き続き設けることが重要である。

2点目は、交流会の内容を生徒と学生主体で考案し、両者がさらに打ち解けられる工夫をすることである。事前に頻繁に連絡を取り合うと、顔を合わせた際の新鮮さが減ってしまうため注意が必要ではあるが、事前にSNSやチャットなどで自己紹介を済ませ、どのような会にしたいか話し合っておくことは効果的であると考える。

3点目は、交流会がもたらす効果を検証することである。今回参加した大学生たちにとつては学習動機を持てる機会となったと考えられるが、学習動機の維持にも有益であるかどうか調査したい。高校生の学習動機につながったかどうかは現時点では明らかではないため、今後の授業等での観察により分析したい。また、フィリピン語の学習動機以外の効果も見られるかどうか分析する必要がある。

注

- 1) 「母語」には様々な定義がなされているが、本論文では「初めて習い、今でも使える言葉（中島 1998）」を母語と呼ぶこととし、「母語以外の親の言葉」を継承語と呼ぶこととする。
- 2) 子どもの両親または一方の親がフィリピン国籍を有するか、フィリピン出身である生徒を指すこととする。
- 3) 道具的動機づけとは「職を得るなど、実用的な理由によって、新しい言語の能力を向上させたい」という欲求（デュレイ・パート・クラッشن 1984: 15）と定義されている。
- 4) 統合的動機づけとは「ある言語集団に参加するために、その集団で話されている言語の能力を、向上させたい」という欲求（デュレイ・パート・クラッشن 1984: 15）と定義されている。
- 5) 該当生徒が在籍する学級の授業や本来受講する授業とは別の教室で、個別にまたは少人数で学習支援を行うことである。
- 6) 授業を行う教員とは別の教員や支援者が、該当生徒が受講する授業に一緒に入り、その生徒の理

解できる言語や日本語を用いて説明するなどの支援を行うことである。

- 7) X高校が立地する自治体では、帰国生徒と外国人生徒を対象とした入学者選抜を実施している他の高校でも、課内または課外で母語・継承語や母文化の保持を目的とした授業が設定されている。
- 8) 対象児童生徒の母語を話すことができ、学校で児童生徒の生活面や学習面の支援に当たる人材のことである。派遣する自治体や雇用形態等により、「日本語指導協力員」、「母語支援者」、「母語指導員」、「外国人児童生徒指導員」、「通訳」、「サポーター」、「特別非常勤講師」等、呼称は定まっていないが、本稿では「サポーター」で統一する。

謝辞

大学生との交流会開催をご快諾いただきましたX高等学校の皆様に心から感謝申し上げます。

文献

Dulay, H., Burt, M. and Krashen, S.

1982 *Language Two*, Oxford University Press, New York (= 1984、牧野高吉訳『第二言語の習得』鷹書房弓プレス、東京).

中島 和子

1998 『バイリンガル教育の方法—地球時代の日本人育成を目指して—』アルク、東京。

斎藤 ひろみ

2005 「日本国内の母語・継承語教育の現状と課題—地域及び学校における活動を中心に—」
『母語・継承語・バイリンガル（MHB）研究』1、25-43。

佐藤 郡衛

2001 『国際理解教育—多文化共生社会の学校づくり—』明石書店、東京。

志水 宏吉（編著）

2008 『高校を生きるニューカマー—大阪府立高校にみる教育支援—』明石書店、東京。